

書 評

木村大治、『共在感覚—アフリカの二つの社会における言語的相互行為から—』
京都大学学術出版会、2003年、326p.

1. 楽屋の近傍から

これは木村大治にしか書けない本である。異文化への驚きと著者固有の知的履歴が希有な結合をとげているという意味で、この本の独創性はきわだっている。内容を一言でいえば、旧ザイールの農耕民ボンガンド、およびカメルーンの狩猟採集民バカ・ピグミーという2つの民族集団における日常の言語活動の観察に基づいて、人類学的な相互行為理論を展開したものである。コミュニケーションに関わる先行学説はもちろんのこと、情報科学、コンピュータ科学、物理学といった「理系」の分野に対する造詣の深さには目をみはらされる。分析手法の数学的な厳密さもまた、本書の大きな特色である。

評者は、木村の思考の直接的な土壌になっている「コミュニケーションの自然誌」研究会の創立当初からのメンバーであり、本書の主要なアイデアが成立する現場につねに居あわせてきた。「仲間ぼめ」の嫌疑を払拭するために、小文の後半(4.以下)では、著者と同じく相互行為理論と格闘してきた者の視点から、ややつつこんだ批判を展開したい。

2. フィールドでの発見

—第I部「民族誌的記載」—

2.1 ボンガンド

本書の核をなす異文化への驚きは、ボンガンドの村でしばしば聞かれる「ボナンゴ」とよばれる特異な発話形式との遭遇である。だっぴろい村の広場で、男が1人たたずみ何ごとか大声で語っている。まるで彼が透明人間であるかのように、その傍らをべつの男がすうっと通りすぎてゆく。見開き2ページにわたって印刷された写真によって視覚化されたこの場面は、読者を一挙に謎の中心にひきずりこむ。木村の分析によれば、発話の内容は、共同作業への誘い、情報の開示、規範の確認、愚痴や警告といったものであった。

このような言語の用いかたを、どのように理解することができるのか。この問いをたずさえて、木村は、ボンガンドの発話世界へと分け入ってゆく。かれらの言語環境の基底をなすのは、ひっきりなしに村中を満たしている話し声(「背景発話」)の多さである。この「うるささ」を定量的に把握するために、木村は、聞こえてくる発話の「数」を15秒ごとに測定するという苦行に挑戦する。さらに「セルフ・フォーカル・サンプリング」という方法まで考案する。インフォーマントに1時間ごとにアラームの鳴る時計をもたせ、そのつど、「誰と一緒にいたか」をノートに記録させるのである。そこから、あるインフォーマントが、20mも離れた家の中にいた老女を「一緒にいた人」として記録してい

たことがわかる。この発見を端緒として「共在感覚」という本書の中心概念が練りあげられる。

共在感覚というアイデアのもう 1 つの源は「挨拶境界」の発見であった。村人がたがいに「挨拶をするか／しないか」の分かれ目は、住居間の距離と明白に相関していた。自分の家から約 200m 以内に住んでいる人とは挨拶をせず、それ以上離れた所に住んでいる人に対しては挨拶をするのである。ここから、ボンガンドにおいて「一緒にいる感覚」はつねにあたりには響きわたる「大声」によって媒介されているという見通しが生まれる。

あの異様ともみえるボナンゴを、木村は「投擲的」という卓抜な用語で特徴づける。ここで彼は、発話 X を頂点とし話し手 A と聞き手 B を底辺とする三角形で表わされる言語行為のモデルを提案する。そこには、 $A \rightarrow X$ ：発話送出行為、 $B \rightarrow X$ ：発話受信行為、 $A \rightarrow B$ ：聞き手アドレス行為、 $B \rightarrow A$ ：話し手アドレス行為という 4 つの別々の行為が埋め込まれている。われわれの日常会話では、この 4 つの行為が同時に一体となって遂行されることが多いので、その区別はふつう意識されない。しかし、ボナンゴにおいては、「 $A \rightarrow X$ 」つまり発話送出行為だけが突出し、他の 3 種の行為は潜在化している。投擲的（それはまさに英語でいう broadcasting である）に言葉を発することこそが、「一緒にいる感覚」を強化するもっとも重要なチャンネルになっている、と木村は考える。

この投擲性の概念を核にして、さまざまな観察が有機的に配置される。たとえば、トー

キング・ドラムでときおり打たれる、ふざけたメッセージ（「腹減った！」など）もまた「ボナンゴ」とよばれる。ボナンゴの謎を解き明かす重要な鍵がここにある。それは、建前としては情報伝達の機能をになう「社会的行為」なのだが、じつのところは「受け流すべき発話」なのである。入念な分析の積重ねは、ボンガンドの「日常の発話は、おしなべてボナンゴ的な色彩を帯びている」という洞察へ収斂する。

2.2 バカ・ピグミー

ザイールの内戦で「研究難民」となった木村がつぎに関心を集中したのが、カメルーンのパカ・ピグミーであった。バカはボンガンドとは対照的な柔らかな社会的態度をもった人びとであった。それを木村は「手応えがない」と表現する。この印象は、男たちが集まる小屋のなかでの会話の時間構造を定量的に分析することによって裏づけられた。木村は周到にも、近隣に住む農耕民バクウェレだけでなく、帰国後に日本人からも同一の手法でサンプルを集め、3 種のデータを厳密に比較している。そこから、発話が「群発」的に促進しあい「発話重複」が起きる一方で、驚くほど長い沈黙が続くという、バカの特異な会話構造がうかびあがる。会話分析の支柱をなす「順番どり」の理論を援用すれば、バカの会話はバクウェレや日本人と比べて「理想的ターン・テイキング」から遠く隔たっているのである。なお、このことをクリアに示す図 19 (p.141) は本書の分析結果のなかでもっとも重要なものであるだけに、グラフに付された説明が逆になっていることはたいへん残

念である。

「群発性発話」という会話の特性はバカの生活世界の多様な側面と織りあわせられ、この人びとの社会性の本質が丹念にうきぼりにされる。精霊の登場するダンスは「べ」とよばれ、その圧倒的なポリフォニーはピグミー研究者のすべてを魅了してきた。木村は、「べ」という集合的行為が、活動の「中枢」や参加／不参加を規制する「枠」をもたぬことに注目し、「相互の志向性が過度に絡み合わずに共生し得ている」社会のありようを鮮明に照らし出す。この緩やかな対他的態度という「地」のうえに、「発話密度」の目まぐるしい変動や、「ドドド現象」とよぶにふさわしい顕著な同調性がくっきりと像を結ぶ。

3. 理論の道行き

—第Ⅱ部「相互行為論的考察」—

第Ⅱ部の理論篇を貫くロジックはかなり入り組んでいる。先行理論や関連研究への参照はすべて省略し、木村自身の思考のもっとも太い縦糸をうかびあがらせたい。

(1) 相互行為現象には独特の「つかまえにくさ」（「記述［からの］逸脱性」）がある。従来の相互行為理論の欠陥は、対面状況における焦点の共有を特権視してきたところにある。ボンガンドとバカの観察から得られる教訓は、「拡散的会話場」それ自体を主題的に取りあげることが肝要だということだ。

(2) 相互行為成立の前提は、相手の行為の規則性を読みとり認識することである。だが、規則性の理解は単なる「観察」であり、コミュニケーションではない。コミュニケー

ションは、それに対する潜在的な身構えが参与者の双方にあってはじめて成立する。視線が合うことは、相互予期が達成されるもっとも特権的な状況である。合わせ鏡のように、相互予期は、私と相手とのあいだに《『私が知っている』ことをあなたは知っている』ことを私は知っている》ことをあなたは…といった無限後退を生み出す。このとき相互予期の先行きは不確定となり、行為の決定は不可能になってしまう。

(3) 現実には、参与者は予期の前段階として状況を見渡し、先行きをある程度把握していると考えられる。また時間軸に沿って行為をすりあわせる「調整過程」をとおして、無限後退を停止させる。だが、無限後退を、解消すべき厄介事として捉えるのは誤りである。「先行きが見えない」ことこそ、相互行為の「面白さ」の源である。そこでは相手を媒介にして自己に回帰するシステムが成立する。「プロセス」の内部処理速度とその間の通信速度が等しい水準へ収束するほど、相互行為は「1つのシステム」へと統合されてゆく。

(4) 予期の分岐を拘束する社会的な力を「共生の枠」とよぶ。この枠は、たとえば「冗談だというコトニスル」といった記述で表わすことができる（この例は評者による）。相互行為現象は「一方的観察層」「相互予期層」「コトニスル層」という3層モデルで把握できる。「拡散的会話場」は「コトニスル層」の「薄さ」として定式化できる。だが、都市的な状況での儀礼的無関心に代表されるように、「コトニスル層」がどれだけ希薄にみ

えても、人間はあらゆる相互行為において、「共在の枠」から逃れることはできない。

(5)「枠」は、週刊誌の見出しに頻発する「括弧」の意味作用と対応するものである。括弧のもっとも本質的な意味作用は「コンテキストに照らして解釈せよ」という指示である。だが、「コンテキストを固定的に指示する規則は存在しない」と同様に、相互行為において行為が枠づけられるときにも、そこに付与される新しい意味を一意的に記述する規則は存在しない。これは相互行為の記述逸脱性の重要な位相である。不可視化された枠は規範的な拘束性をおびるが、枠を固定的なコードと混同することは誤認である。

(6) 相互行為の記述逸脱性を発生させる機序は、(a) 相互予期によって行為の先行きが分岐すること、(b) 行為への枠づけによって新たな意味が生成すること、の 2 点にまとめられる。電磁気学や数学で用いられる「双対性」の概念を応用した「双対図式」は (a) (b) を統一的に理解することを可能にする。予期の分岐のなかから 1 つの行為を選択することによって枠は生成し、同時に、枠は行為連鎖の方向性を決定する。

(7)「3 層モデル」[上記 (4)] のコトニスル層とは、相互予期と双対的に生成する「枠」の特殊な一形態にすぎない。挨拶や会話場への直接的な参入によって「出会ったコトニスル」という手続きは、相互行為状態が成立する必要条件ではない。にもかかわらず、挨拶や会話は、われわれに特別な「実体感」を与える。そこには「共一現前」すなわち「同じ事象が互いにとって明らかである」という事

態が成立している。

(8) 双対図式を用いて、ボンガンドとバカそれぞれの共在感覚をモデル化することができる。ボンガンドでは「各個人は、他者を切り捨てた独自の行為連鎖をなし、それに随伴した小さな「私の行為」の枠を形作っている」のに対して、バカでは「各個人の行為は他と共鳴しつつ、ゆるやかに振動するという形でなされている」。Q. E. D.

本書の最後の章は、電子コミュニケーションの普及した現代社会における共在感覚の変容を論じており、興味ぶかい内容をたくさん含んでいるが、紙数の都合で論評は割愛した。

4. 批 判

第 I 部で、バカの他者に対する構えが「言葉を変えなくとも共在できる状況を作り出している」ことを指摘したあと、木村は書く。「その世界に浸っていると、なぜわれわれの社会で、出会っている人々はせわしなくその間を言葉で満たさなくてはならないのか、そのことが逆によくわからなくなってくるのである」(p.150)。この文にこそ、木村の人類学者としての姿勢が凝縮されている。異なる生活世界に「浸る」ことによって、自明にみえていた「われわれのやりかた」(エスノメソドロジー)のほうが「よくわからなくなる」。本書は、われわれが身を浸している「近代理性」を根底から批判するという、ひそかな野望に貫かれている。このスタンスに評者は全面的に共感する。そのことを確認したうえで、上記 3. の要約に付した番号に

対応させて、疑問点を指摘したい。

(2) 評者も列席した研究会で大澤真幸氏（京都大学大学院人間・環境学研究科）が発した「太陽の運行の規則性を理解することはコミュニケーションとはいえない」という主旨の批判こそが、木村の思考の決定的な転回点をなしたようである。だが、この批判をべつな形で乗り越えることも可能だったのではなかろうか。たとえば「月」のふるまいの規則性を理解したとしても、さまざまな形でさまざまな場所に現われる月から不思議なメッセージを受けとった気になることが、われわれにはある。本書では「コミュニケーション」と「相互行為」の違いが明示的に論じられていないが、少なくともスペルベル／ウィルソンの関連性理論を批判するのであれば、「コミュニケーションは、本来、非対称な過程である」というかれらの洞察と正面からわたりあう必要があったのではないか。とくに精霊が跳梁する社会に身を置いてコミュニケーションを考察する際には、従来、浅薄に「アニミズム」とよばれてきたような、自然的世界と人間との「交感」をも視野に入れることが、別の道を切り拓いたのではなかろうか。

この道はあまりにもとっぴにみえるので、木村が早々とそれを閉じてしまったことは無理もないことである。だが、彼が選んだ代替路は正しかったのだろうか。評者には、例の「無限後退」が、現実の相互行為にとってリアリティをもつとはどうしても思えない。子どものころ真剣にじゃんけんをしたとき「裏の裏の裏の…」を心のなかで読む努力をした

人は多いのではなかろうか。だがそれはある種の「呪文」にすぎず、数秒のうちに「打ちきらねば」ならない。かつて他者への付度をあっさりと「打ちきる」ことの偉大さを論じた木村〔1997〕が「合わせ鏡」を出発点に定めたことに、評者は意外の感を否めない。評者のフィールドには雨季のわずかな期間に出現する水たまり以外には、「鏡」とよべるものはなかった。「合わせ鏡」の隠喩から逃れるもつともてつとりばやい道は、「鏡」のない社会でみずからの思考をシンプルにそぎ落とすことではなかろうか。

(3) あらゆる理論はなんらかの隠喩性から免れることはできない。「鏡」とともに、木村の思考を組織している隠喩は「コンピュータ」である。相互行為がシステムとして成立することの尺度を、プロセス内部の処理速度とプロセス間の通信速度との比に求めるという考えかたに、評者は違和感をおぼえる。ここには内部と外部の区別を自明視する二元論が顔をのぞかせている。もう1つ「コンピュータ隠喩」を用いることの重大な帰結は、相互行為が脱＝身体化され、そこから「表情」が失われてしまうことである。民族誌記述のなかで評者をもっとも深く揺さぶったのは、バカの「べ」に初めて遭遇したときの感動を走り書きしたフィールドノートの断片である。「この森に響きわたる声は何だ。あのおとなしく柔らかに笑う女たちが、この張りのある、弓なりに反った声をあげているのだ」(p.162)。ほんとうに、それは「何だ」だろうか。こうした官能的な記述をすべて脱色してしまうことは、理論構築にとって不可避

の代償なのだろうか。

ふたたび「合わせ鏡」に戻って「内部プロセス」について考えてみよう。ゼノンのパラドックスと同様、無限後退とは、意識の内部に仮構された「無時間性」においてのみ発生する。時間の次元を取り去った仮想空間のなかで「力学系」の比喩は意味をもつのだろうか。時間軸に沿った「調整過程」こそが相互行為の本質であることは、仮構された無限後退を苦心惨憺して除去しなくたって、生の現実において初めから直観されることである。これと関連するが、木村の思考が透明度の高い論理につらぬかれているだけに、その思考を駆動する動機づけが「相互行為の面白さ」という印象主義的な語に集約されていることは、不徹底といわざるをえない。評者の個人的な「印象」を対置すれば、毎日きまりきった「やりとり」を繰り返すことこそ、相互行為の「幸福感」の本質である。「先が見えない」相互行為のなかには「脅迫」「いじめ」「肅清」といった抑圧的なものも含まれるだろう。なによりも不満がのこるのは、「面白さ」を活写する具体例があげられていないことである。「べ」がそれにあたるのかもしれないが、「べ」から沸きあがる「異様な感動」は、上述したように、理論化のなかに明示的に統合されてはいない。

(4)「コトニスル」層の分析でとくに気になるのは、「視点」の曖昧さである。本書では「私」と「相手」が出会う例が2度にわたって分析されるが、世界の内部にいる「私」の視点を死守するなら、三人称を用いて「相手が私に気づく」と述べるのは禁じ手であり、

「私は、相手が私に気づいていることに、気づく」という記述しか許されないはずである。木村は「フィールドでの〈私〉の違和感」から出発しながら、理論構築においては、相互行為をその「外部」からながめる視点へと移行したように思える。科学的手法を武器にして「観察」を徹底するかぎり、外部的視点は不可避だということなのだろうか。だが「面白さ」という直観にあくまでもこだわるのであれば、「外部的視点」を解体するという困難な作業を避けて通ることはできないだろう。

(7) 最後のほうでやや唐突に「共一現前」という概念が導入されることは、 unnecessaryな迂回路と感じられる。「拡散の会話場」の重要性を強調するという立場からすれば、「対面状況」や「共同知覚経験」の特権化を攻撃するのは理の当然である。だが、「共在感覚」のもっとも圧倒的なリアリティ（木村はそれを「実体感」とよぶ）が身体として対面することから生まれることまでをもやっきになって否定する必要はない。聞きまちがえ／見まちがえといった「もっと複雑な事情」は、「生活形式の共有」という、人類学がそこに根拠を置いている厳然たる事実によって、あらかじめ「一発で」解消されているのではなかろうか。

理論篇をたどる途上でいくつかの疑問が生じたにもかかわらず、木村が最後にたどりついた双対図式に、評者は大きな感動をおぼえた。この図式が、今後の相互行為論の展開に強力な指針をあたえることは確実である。

最後に、悪い書評とは、読者に「もう読ん

だ」気にさせてその購買意欲をそぐものである。小文では、本書にはりめぐらされた精緻な思考と、そこかしこにみなぎる知的興奮のごく一部しか取りあげられなかった。この書評が、本書の面白さを〈保証し〉、読者に買うことを〈命じる〉という言語行為を適切に遂行していることを願うばかりである。

引用文献

木村大治. 1997. 「相互行為における「打ち切り」のストラテジー」 谷 泰編『コミュニケーションの自然誌』新曜社, 414-444.
(菅原和孝, 京都大学大学院人間・環境学研究科)

玉田芳史. 『民主化の虚像と実像—タイ現代政治変動のメカニズム』(京都大学東南アジア研究センター地域研究叢書 14) 京都大学学術出版会, 2003 年, viii + 364 p.

本書は、タイの現代政治について一連の興味深い論考を発表してきた玉田氏の単著であり、平成 16 年度大平正芳記念賞を受賞した作品である。安易な、そして実証性を欠く通説に惑わされることなく、具体的なデータに基づいてタイ現代政治を剔抉する玉田氏の研究スタンスには学ぶことが多い。以下では早速、本書の解題を行っていくことにする。

本書は主に 1990 年代のタイの現代政治を扱っている。タイといえば「クーデタ銀座」とよばれるほど国軍による政権奪取が頻繁であった。しかし、91 年 2 月以後クーデタは

行われなくなり軍は政治から撤退し、政党政治が定着して民主化が進んだ。そして、90 年代半ばには現行の政党政治に不満を抱く勢力により政治改革論が持ち上がり、タイ史上もっとも民主的と宣伝される 97 年憲法が制定された。なぜなのであろうか。この問いに答えるにあたり、タイ研究者やタイ知識人のあいだでは、中間層こそが 90 年代タイの民主化の立役者であったとする見解が通説となっている。中間層主導説が通説化した理由は 92 年の「暴虐の 5 月事件」における中間層の次のような役割である。92 年 3 月の総選挙で親軍政党連合が勝利すると、陸軍総司令官スチンダーが前言を翻して首相に就任した。そのことに抗議する大規模な集会が開かれると、国軍は彼らに発砲して 100 人程度の死者行方不明者を出してしまった。これが「暴虐の 5 月事件」である。発砲が国軍非難を強め、国軍の政治からの撤退を促すと同時に、都市部中間層は集会に参加していたことで民主化の殊勲者、さらには推進者と位置づけられるようになった。80 年代まではほとんど注目されなかった中間層が集会参加の一事をもって民主化の推進者となりえたのは、経済成長により都市中間層が拡大し、その結果政治が民主化されるという近代化論の説明に見事なまでに符合する事例であったためでもある (p.22-23)。

本書はこの通説を「虚像」とであるとみなし、民主化の「実像」を解明することを目的としている。章構成は次のとおりである。

1 章：タイ政治の民主化をどう眺めるか
第 1 部：1992 年 5 月事件

- 2 章：大規模集会：理由と影響
- 3 章：軍の政治力低下：理由と過程
- 第 2 部：政治改革論と新憲法
- 4 章：1997 年憲法の起草と政治的意味
- 5 章：2000 年上院議員選挙：なぜ公務員議会の再現なのか
- 6 章：2001 年総選挙：政治はどう変わったのか
- 終章：タイ政治の民主化

本書の主張する「実像」をまとめると次のようになるであろう。

本来、5 月事件の主役は大衆動員に成功した野党党首チャムローンであった。しかし、チャムローンは国王により流血の事態を招いた責任を首相スチンダーとともに負わされて影響力を失ったうえ、マス・メディアが中間層の役割を過大評価したことで、都市中間層は 92 年 5 月事件の主役の「乗っ取り」に成功し、民主化の推進者に化けることに成功したのである。そして、彼らが「正真正銘の人民の憲法」とされる 97 年憲法につながる政治改革を支持していくことになった。

では発砲した国軍はどうなったかといえ、90 年代を通じて全く政治力をなくしてしまった。国軍の政治からの撤退を引き起こした理由は、「冷戦の終焉、世界的な民主化の潮流、経済の高度成長と破綻、或いは都市中間層からの圧力といった軍に外在的な要因でもなければ、軍人の意識の変化という捉えがたい要因でもなく、人事にこそあった」(p.133) としている。まず、国軍が反政府デモに発砲するという強硬手段に出たのは、当

時の国軍が人事によりスチンダー閣で固められており、軍首脳にとっては政権延命が最善の策だったからであるとする。政権維持の失敗後、90 年代を通じて軍が政治力を失ったのは、分断人事によりクーデターを起こせないほど陸軍司令官の指導力が弱まったからであるとする。

軍が政治から撤退し、民主政治が定着しはじめた 90 年代の政治的対立軸は都市部対農村部になった。90 年代半ば、都市中間層は民主化推進派として政治改革論を積極的に展開していく。その時の標的は中央レベルで政治的影響力をもつ地方実業家兼政党政治家および彼らが牛耳る政党政治であった。軍の撤退と数がものをいう民主政治の定着とにより 90 年代には人口の大多数の住む農村部の政党政治家が中央政治を牛耳る状況が生まれていたのである。その原型は 80 年代に求めることができる。80 年代、王室と軍に支えられたプレーム政権が左翼政党を掘り崩して政党総保守化を促す一方で、下院議員全員に開発予算を割り当てて彼らの懐柔を図るだけでなく、徐々に閣僚に占める下院議員の割合を高めて民主化への「管理された移行」(ペイ)を行なった。その結果、政党は着実に政治力をつけていった。左翼勢力の衰退とともに、当選するには弁舌の才ではなく資金力が圧倒的に重要となり、実業家が政党を、政党が議員を、議員が集票請負人を、請負人が有権者を買収するという仕組みができあがっており、農村部の政党政治家が優位な政治的安定が構築された。首都バンコクが農村部を支配するのがそれまでのタイ政治の特徴であり、農村

部住民はバンコク市民から「二等市民」とされていたにもかかわらず、80年代に入って主客逆転現象が生じたのである。

こうした状況に不満を抱いた都市中間層は、政党政治家による金権腐敗政治を批判し、清廉で能率的で安定した政治を求める改革論を支持しはじめたのである。5月事件を通じて民主化の「乗っ取り」に成功して「傲慢に」なった都市部中間層は、『声は大きい』ものの『票数は少ない』にもかかわらず、知識人、実業家、NGOなどを加えて「市民勢力」となり、『声は小さい』ものの『票数は多い』農民を排除して政治改革論を主張していき、97年憲法制定に導いた。97年憲法は住民の意見を聞き取る仕組みを作って制定されたことから、「正真正銘の人民の憲法」と謳われたものの、実態は、そうした都市部中間層による政治改革論を反映したものであり、人口の大多数を占める農民に差別的で都市部中間層に有利なものであった。閣僚、上院下院議員いずれも大卒以上を資格要件とすることで農村部人口の95%が被選挙権を失い、さらに農村部が数的に優位な小選挙区からの選出議員には実質的に閣僚就任を困難にする規定を設け、都市部エリートが多い比例区選出議員が閣僚に就任しやすいようにしたのである。都市中間層は民主化推進派というのは虚像にすぎない。90年代のタイの都市中間層は農村部出身の政党政治家が行う民主政治にむしろ反発していたのであり、97年憲法はその反発を具体的に表明したものであった。ただし、都市中間層に有利とはいえ97年憲法は民主政治を否定したわけではない。

そのことからすれば、97年憲法は、民主政治を否定しかねない都市部中間層を「慰撫」し、民主政治の定着には貢献したといえる。

当憲法に基づいて行われた2001年総選挙の結果、タックシン率いるタイラックタイ党が圧勝した。このタックシン政権は国会の安定多数を確保し、比例区選出議員を閣僚に登用して、首相の指導力が発揮しやすいだけでなく、行政官庁と軍の人事にも関与して強い立場を保持しており、政権として過度に安定しすぎている。それゆえ、タックシン退陣が政治的不安定をもたらす可能性が高いという。これが90年代のタイ政治の民主化の実像である。

それでは、以下、評者がタイ政治専門家ではないことを予め断ったうえで、5点指摘しておきたい。

① 都市部中間層を90年代のタイの民主化推進派とする通説を虚像とし、実像は次のようであるとする。中間層は92年5月事件の主役を乗っ取ることで民主化推進派に化けたにすぎない。化けた後、彼らは民主化推進派の仮面を被ったまま、清廉で安定した能率的な政治を求める改革論を支持し、農村部選出の政党政治家による民主政治を批判して、都市部中間層に有利な、そして非民主的な要素を含む97年憲法制定にこぎ着けた。この一連の論旨は非常に明快であり、その資料的裏づけも豊富である。ただ、民主化に反対する消極勢力がどのように宥和されたかに本書は注目するとしており、90年代の都市部中間層もその一派に位置づけられている。しかし、97年憲法制定までの本書の記述を読む

限り、彼らは慰撫された存在というよりも、タイの民主政治の諸特徴を根本的に損なうことなく積極的・主体的に彼らの都合の良いように政治体制変革を図ろうとしている。そのことからすれば、彼らを受動的に慰撫された存在として位置づけるよりも、清廉で能率的で安定した政治の実現を図るという一種のイデオロギーを武器に積極的に自己の利益実現を図った存在として位置づけた方が良いように思える。

② 80 年代から 90 年代半ばまでのタイ政治の特色の記述は明晰にして興味が尽きない。ただ、「有権者に対して鈍感たりえた」(p.339) 政党政治という指摘は究極的には正しいにしても、タイの下院議員にはフィリピンのポーク・バレルのような資金があり、閣僚に就任すれば地元利益還元を図ることができ、実際にも行っていたこと、そして恐らくそれが故に現職下院議員の再選率が高かったことを考えると、有権者の日常的要求に応えることはその頃の政党政治を維持するうえで必要な要因であったであろう。「政党政治が有権者からある意味で超然とすることができた」というのは、有権者の声を国政レベルでまとめ上げて政策化して実行する必要がなかったということであろう。

③ タックシン政権は内閣支配、国会支配、行政官庁・軍への管理統制の成功によって過度に安定しているという。そして、農村に対してもばらまきを行って農村部対策も講じている。では、政治改革論を支持し、97 年憲法制定にこぎ着けた中間層とタックシン政権との関係はどのようなものであろうか。97

年憲法制定の 1 つの帰結がタックシン政権であったとすれば、タックシン政権としても中間層のための政策を行っていよう。タックシンが実業家であることから、基本的に都市部中間層の利益を一般的に考慮することは間違いない。だが、具体的にどのような政策が講じられているのかについての記述があればもっと面白いであろう。都市部中間層への具体的政策が実施されとなれば、タックシン政権として彼らを一枚岩的に扱うことはできなくなり、結果としてセクター別にタックシン政権への支持の色合いも変わるであろう。そして、そのことが別の政策を標榜する政党の誕生へ結びつく可能性もあるであろう。

④ 大卒条項は都市部に有利な条項とされている。確かに、農村部人口の大半が被選挙権を失うことを考えれば正しい。しかし、金さえあれば学士号は簡単に取得できるであろうから地方レベルの実業家にとってはそれほど問題のある条項とはならないであろう。この条項はむしろ皮肉なことに農村部において実業家と一般農民との間の大きな差別化を招く結果になっているのではないであろうか。

⑤ 本書の冒頭において、タイの民主政治の定義を次のように行っている。タイは立憲君主国であり、議院内閣制が採用されていることから、タイの民主政治とは 1. 競争的で公正な選挙が実施され、2. 選挙により国会の多数派が変化して政権交代が実現し、3. 選挙で選ばれた国会議員が首相をはじめとする閣僚に就任することである (p.17)。本書におけるタイの民主化論はこの定義が出発点となっている。では、この定義はタイにおいて

一般的に民主政治というときに想定されているものなのであろうか、あるいは、本書が演繹的に導き出したものなのであろうか。いずれにしても、本書の出発点であるこの定義についてもう少し説明が必要だと思われる。

80年代から90年代のタイの政治については本書でかなり描き尽くされた感があり、今後のタイ政治研究者の必読文献になることは間違いない。では何がタイ現代政治の研究課題として残されているであろうか。1つはタクシン政権研究、そしてもう1つは本書の著者が別稿で指摘していたように地方政治、農村政治研究であろう。

(岡本正明, 京都大学東南アジア研究所)

Olli-Pekka Ruohomäki. *Fishermen No More? Livelihood and Environment in Southern Thai Maritime Villages*. Bangkok: White Lotus, 1999, xiv+287p.

本書は、ここ20年ほどの間に急激な社会経済的变化を経験してきた、タイ南部アンダマン海沿岸に位置するムスリム漁村社会を扱った民族誌的研究である。同書において著者は、それぞれ異なる開発が進展する2つの漁村での綿密な現地調査に基づき、国家政策など調査地を取り巻くマクロな政治経済的変動とともに、それにより生じた村落社会の変化と村民の対応の双方に焦点をあてている。この作業を通して本書は、現代タイにお

ける漁村社会の現状を、「動態的」に理解することを試みているのである。

本書の著者であるルオホマキは、ロンドン大学で博士号を取得後、現在は母校ヘルシンキ大学人類学学部の研究員、ならびにNGO職員として東南アジア諸国の地域開発に携わっている。また彼は、本書の基盤となる現地調査(1993年7月~94年5月)を含め計15年もの間タイに滞在し研究に従事してきた。この稀有な経歴は、本書の随所に提示される豊富な現地データや、節・句に細かく分けられた本文構成に反映され、本書を読み応えのある民族誌にしている。

まず内容を紹介しよう。全体は5つに区分され、序(第1章)と4部立て(第2~8章)から構成される。以下、章別に内容を追っていくと、導入部としての第1章ではまず、先行研究における本書の位置づけや研究方法など、これから本書を読み進むにあたっての大まかな見取り図が示される。ここでは本書の課題が、調査地を対象に「近代化の浸透とそれに対する現地社会の対応(p.3)」という現代人類学の中心的研究課題の1つを検討することとされる。その際著者は、近代化に対する村民の対応が、最も明瞭な私たちで顕在化したものとして、村民の「生業(livelihood)」を取り上げている。

第2章「産業型漁業と非海洋型沿岸開発」では、調査地を含むアンダマン海沿岸域における環境資源利用のポリティカル・エコノミーが考察される。具体的には、水産物やマングローブをめぐる地域住民と外部者の対立、観光開発、国家主導型開発の1つ「南

部沿岸域開発計画 (The Southern Seaboard Development Project, 以下 SSDP)」に焦点をあてることで、資源利用の多様なあり方とそれが引き起こす諸問題、ならびにその背後に存在する国家政策など国内外の政治経済的要因の概略が描かれる。これは、次章以降に考察される調査地の微細な状況を、よりマクロな枠組みに位置づけて理解する際の基盤となっている。

第 3 章「コミュニティ」では、調査地の大きな概略とともに、旅行者見聞録や古老の語りを通して 18 世紀から現在に至る調査地一帯の歴史が描かれる。本書の調査地である 2 村落は、タイ南部西海岸側のクラビー県に位置し、ムスリム世帯、何がしかのかたちで漁業に従事する世帯が、村人口の大半を占めるムスリム漁村である。同地は、20 世紀初頭まで人家も疎らな自給自足に近い社会であった。しかし 1960 年代以降の漁船動力化や各種インフラ整備の進展、さらには 1980 年代後半から、大量の貝化石を含む浜辺を観光資源とした観光開発、SSDP 導入による工業港形成といった工業開発が、それぞれ各村に展開することで、調査地社会は次第に世界経済に包摂されることになったという。

第 4 章「世帯、ジェンダー、社会関係」で著者は、調査地における世帯構成、ジェンダー関係、儀礼、社会的ネットワークや、現代タイ社会におけるムスリム社会としての調査地の位置づけに触れることで、同地の社会構造とその特徴の把握を試みている。ここでは調査地が、言語や父系・母系といった単系

ではない双系制に基づく居住・相続形態などの社会構造に関して、国内の仏教徒農村社会と多くの共通点をもつとされる。その一方、タイにおいてムスリム社会は、宗教の相違に基づくさまざまな差異が強調され、時に偏見に晒されているという。つまり調査地は、仏教徒社会との共通性とともに、その差異が強調されるというアンビバレントな国内状況にあることが明らかにされるのである。

第 5 章「生計をたてる」では、村民の持つ多様な生業とその変遷の把握から、調査地における経済構造の変容の姿が描かれるとともに、これまで主生業であった漁業の今日的状況と今後のあり方が問われる。そこでは、ここ 10 年ほどの地域経済の急速な変化が、それまで調査地において存在しなかった工業、観光関連の雇用を生み出すなど、漁業がもはや唯一の生業ではないことが指摘される。さらにこの生業の多様化は、村民間の経済格差の拡大と、それに基づく社会区分を生み出しており、著者はこの傾向が同地において今後ますます顕著になるであろうと予測する。

続く第 6 章「資源をめぐる争いへの対応」は、第 2 章で明らかにしたアンダマン海沿岸域の資源をめぐる争いに対する地域住民側の対応の一例として、漁民に視点を向ける。具体的には、調査地の位置するクラビー県にみられる環境 NGO の環境保護活動と、それが地域社会に定着していく様子が、「南タイ零細漁民連合」とよばれる零細漁民組織を検討することで明らかにされる。ここで著者は、NGO 仲介のもと漁民が、環境利用をめ

ぐる諸問題について共通の問題意識を有し、自らそれに対処するというエンパワーメントがみてとれるとする。さらにこの草の根の動きは、NGO の政治的地位獲得のための手段という側面をもつ一方で、政府の政策立案に影響を及ぼす潜在的な力を有する、タイ社会の新たな動きと捉える。著者はこの矛盾した状況を踏まえたうえで、漁民の結束とエンパワーメントこそが、彼らの目指す持続可能な資源利用の達成に肯定的に作用すると述べる。

第 7 章「世界経済下の南タイ沿岸社会」では、これまでみてきた近代市場経済の浸透に伴う環境の「商品化」と、村民の生業の多様化が、調査地社会に引き起こす諸問題について考察している。とりわけ SSDP、観光開発、商業型漁業を対象に、調査地を含むアンダマン海沿岸域社会の今後のあり方が予測されるのである。著者はまず、村民の今日的位置づけを、物質的、社会的次元において伝統と近代性の「狭間にある (p.193)」とする。しかし彼らは近代からの圧力のもと、旧来の生業と新たに生まれた多様な生業の中から、自身の生業を選択することを不断に迫られているという。そこでは特に、開発に参入した世帯や若者が、新たに生まれた近代的な生業を肯定的に捉えることで、調査地社会は（反対者も存在するが）伝統と近代性の「狭間」から次第に近代よりの「発展」の方向に向かいつつあるとされる。

結論としての第 8 章では、これまでの議論を要約したうえで生業、環境、開発、資源保護が複雑に関係しあう姿が、調査地を含む

アンダマン海沿岸域社会の特徴として再確認される。そのうえで、調査地に生起する急激な社会経済的变化とそれに起因する諸問題の解決にとり、開発と保護の間のバランスのとり方が重要になるとして、以下の提言がなされる。つまり国家は、資源管理をこれまでの国家主導型から共同体基盤型にすることで、地域住民間に資源所有の意識を芽生えさせると同時に、従来からある生業を維持するために環境指向型の生産システムを構築しなければならない。その実現には、政策策定の過程に対象となる地域社会の意見を反映する住民参加型の政策決定環境の構築が不可欠である。著者は、これが実現されたときに、地域社会の急激な社会経済変化は抑制され、地域環境の安定的な使用が可能になるとして本書を結んでいる。

以上、本書の概略を述べてきた。特に本書は、先行研究の蓄積と、それらが持つ共通した視点に批判の目を向けたという点において、その学問的意義を指摘できる。これまで人類学や社会学の領域からなされたタイ社会研究を概観すると、南タイ、ムスリム社会、さらには漁村社会を対象とする研究は、他の研究対象を扱ったものに比べてごく僅かであった。この傾向は逆にいうと、従来の研究者のタイ社会理解が農村中心的、仏教偏重的であることを示しているともいえよう。要するに本書は、主流テーマと「正反対」の対象に焦点をあてることで、先行研究の不足点を補うとともに、研究者たちの偏ったタイ認識に警鐘を鳴らすものと評価できるのである。またこの試みは、SSDP に代表される開発を

めぐる調査地の錯綜した状況を、そこにかかわる村民や外部組織の多様な動きも踏まえて捉えようとした「開発研究」の力作といえる側面も有している。

だが一方で、いくつかの問題点も指摘しておきたい。まずは、資本主義経済の浸透に伴う村民の今日的位置づけについてである。著者は、若者を中心とする開発肯定派村民が、ブランド品の所持に代表される欧米型のライフスタイルを「最先端 (*thansamai*)」、さらには「発展」と同一視する事実に基づき、村落社会が伝統と近代性の「狭間」から近代寄りの「発展」段階へとその位置を移行させているとする。しかし本書では、彼らの用いる「発展」の現地語のみならず、その他大勢の村民が示す多様な「発展」観も考察の対象から外されている。つまり調査地の「発展」は、一部村民の「発展」観のみに基づくことで、近代化の進展と同義のものと単純に捉えられているのである。このため本書は、その豊富なデータにもかかわらず、短絡的な「発

展段階論」的研究と評される危険性を有しているといえよう。また本書が、調査地の社会的変化を扱うのであれば、村民間の経済格差の拡大だけではなく、彼らの格差認識などそれが村民の日常生活に及ぼす具体的な影響のあり方を詳述すべきではなかったか。さらに欲をいえば調査地における宗教活動のより広範かつ詳細な報告が欲しかった。開発の進展と同様にイスラームは、それが持つ社会的拘束性により、村民の生業のあり方に影響を及ぼす要因となり得るからである。

しかし繰り返しになるが、本書の研究対象、あるいはそれらをよりマクロな諸要素との関係から把握することで有機的に結びつける視点、方法は、現代タイ社会を考察するときに、新たな理解の枠組みを提示する意義あるものと評価できる。今後は本書を足がかりに、先述した問題点を乗り越える試みがなされることで、この分野の一層の学問的発展を期待したい。

(小河久志, 総合研究大学院大学文化科学研究科)